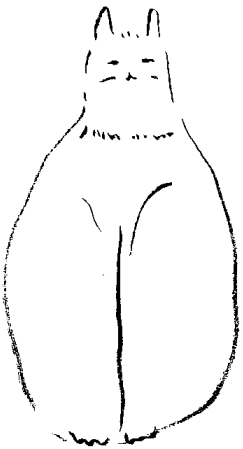
クン氏のおだやかでラジカルな日常

松本東洋

アズ工房



クン氏のおだやかでラジカルな日常

一九八九年一月一九日初版発行
一九八九年五月一五日第四刷発行
定価一〇三〇円（本体価格一〇〇〇円）

著　者　松本東洋
発行所　アズ工房
〒102東京都千代田区五番町十二―二―2―94
電話〇三―二八八―二七一三
製版・印刷・製本　株式会社　精興社
発売元　株式会社　童話屋
〒150東京都渋谷区渋谷一―二―一〇
電話〇三―四〇九―六四六〇

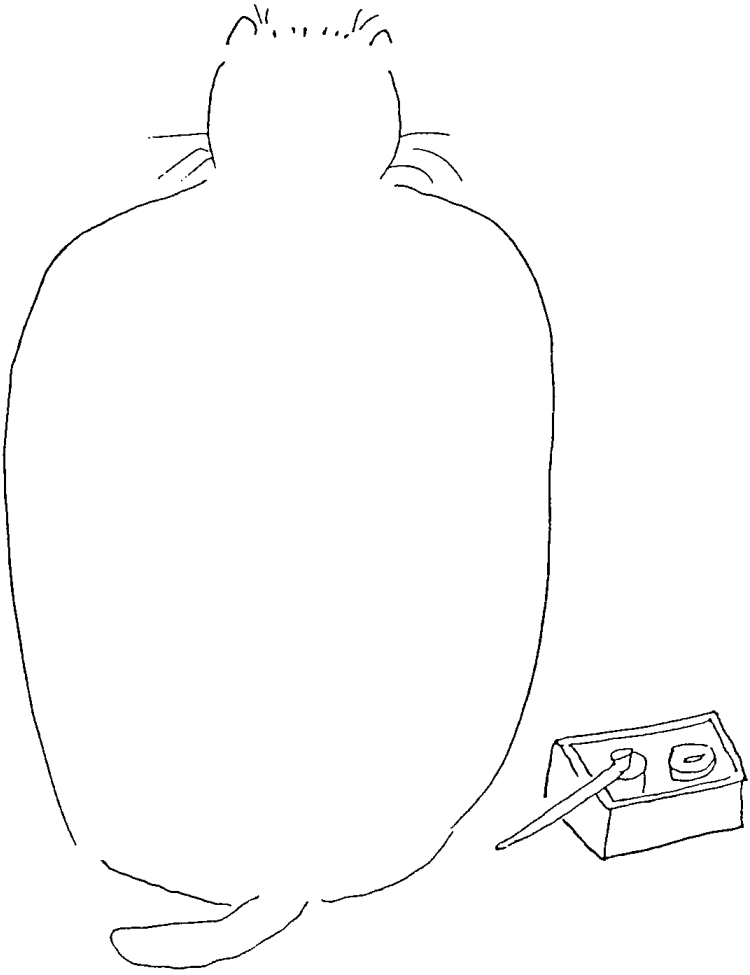
落丁・乱丁本は、おとりかえいたします。

ISBN 4-900546-00-3　C 0093　P 1030 E

クン氏のおだやかでラジカルな日常

松本東洋

アス工房



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

あの仕事は　高級で知性的でいい仕事　この仕事は　誰にでもできる
ツマラナイ仕事　と区別する心が　自分自身にもたらすもの　9

人に嫌われたとき……ただ落着かないのか　その人に好かれたいのか
それはそれで　べつにいいのか――　21

受け身でいる人って　自分をなにかに支えてもらいたがっているのです
「わたしを支えて」……それが
その人のアンダー（言葉の奥の）メッセージです　33

クン氏日記・1　42

若い人は　どこに行こうとしているのかな　45

考えてるつもりで　人や自分を裁いているときが　ありますね　57
クン氏日記・2　70
自分　というのは　［いま・ここにいる感じ］　です　73
この感じを　人はだれも　愛シテイマス
クン氏日記・3　98
他人なんてアテにしちゃイケマセン
それは　他人が不人情だからではなくて
アテにしているうちは　自分の不安ってなくならないからです　101
自分の［座］を得るための　水面下の戦い　119
クン氏日記・4　140

ヒトは　まず　ビックリしている　143
文明社会の中で　ピタリと立ち止まっているには　161
クン氏日記・5　178
Love Letter　181
クン氏のバックグラウンド風哲学・1
［自分］は［世界］であり
［世界］もまた［自分］である　ということ　207
クン氏のバックグラウンド風哲学・2
精神のおおもと　に　行きつく　231

装丁　島田光雄
絵　松本東洋

あの仕事は
高級で知性的で　いい仕事
この仕事は
誰にでもできる　ツマラナイ仕事
と　区別する心が
自分自身に　もたらすもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

クン氏の簡単な自己紹介と　仕事のこと

私は、ごくふつうの男です。

平均的な身長、平均的な体重、ちょっと遠視、どこにでもいる人間です。

変っているとすれば（自分では変っていると思っていないのですが）、［職業］というものがないのです。

［仕事］はするのです。先週は大工をやりました。押入れを改造し洋服ダンスをつくり、冬も過ぎたので、いろりのフタもつくりました。我ながら満足のいく仕事でした。

それから、今ここに書いているこういう文章も書きます。

しかし、大工も文章書きも［職業］ではありません。注文を受けたこともないし、手間賃・稿料をもらったこともないし、職業別電話帳にのったことがない。

「おーい。いるかい？」友人が来ました。あの声は、オモチャ会社で働くオモ氏の声です。

「なにしてたの？」

「考えゴト」
「なにについて？」
「仕事とか職業について」
「お前は、なんにもしないから、そういうことについて考えるんだな」
「今日はいろりのフタをつくった。明日は門の鉄扉にペンキ塗りをする」
「けっこう、けっこう。自分にできることはなんでもやりなさい。
ところで［仕事］というものについてね、ちょっと感じるところのあった話を二つ教えてあげるよ」
以下はオモ氏が教えてくれた話です。

アメリカの作家でね、いずれ近々ノーベル賞をとるだろうと言われている人なんだが、その人がインタビューに答えて
「いつか書けなくなるんじゃないかという恐怖は、いつももっている」と言ってるんだな。深刻な顔でさ。

小説を書く人が小説を書けなくなったら、書くのをやめればいいだけのことでしょう？やめるもなにも、その時は［書けなくなっている］んだから［書かない］でいる、それでオシマイだよね。恐怖もヘチマも、他にどうにもならないでしょう。

どうにもならないことで悩んだって、仕方がない。

お金があるんなら釣りでもしていればいいし、遊んでるより働いてる方がいいのなら、駐車場の係員だって清掃夫だってあるじゃないか、ねえ。

「そりゃそうだが、作家と清掃夫では違うよ」という人もいるだろうが、何が違うんだい？

社会的な身分？

作家でいられなくなって清掃夫になる、というのは、社会的に身分が下がる、ということなのね。

身分が下がる、と自分で思っているから、自分でコワクなるわけだ。

作家が、いつかは書けなくなるかも知れないと思ったとき、それが恐怖になるというのは、その人自身が作っている職業的価値観、身分観、つまりその人の観念が原因だね。

「いや、その作家氏一人の観念の問題ではなく、世の中の多くの人が、そういう観念を、やっぱりもっているから」と弁解する人もいるだろうが、ハッキリしているのは、そのような人たちが、そのような職業的価値観・身分観をこの世界に持ち込んでいる、ということ。これは明白な事実だな。

ラジカルな考え方

ワタシ「ふむ、ふむ。オモ氏の考え方は、ラジカルだねえ」
オモ氏「ラジカルではないよ」
ワタシ「ラジカルだよ」
オモ氏「ラジカルって［過激］ってことだろ？」
ワタシ「ラジカルって［根本的］ってことだよ」

辞書を見ると、どちらも出ています。ただし第一義は［根本的］。些細なことで、私ちょ

っと得意になります。
オモ氏「まあ、それはいい。次の話はね」

誰だったか忘れたが、とても高名な、大家といわれる画家が、雪風景を描きたくて、雪の降る田舎の小径にキャンバスを立てて描いていたんだそうだ。
すると、通りかかった田舎のじいさんが
「あんたも大変だねえ。そんなことしないと、食っていけないのかい？」と慰めてくれたそうなんだな。
そのじいさんの感覚でいえば
「有名だろうが、お金持ちであろうが、いいトシしてあんな寒い所でじっと立ったまま絵なんか描いてなきゃならんのは、ツライ話だわさ。わしは、ごめんだね」だったのだろうな。
「寒い時は、コタツでぽかぽかあったまりながら、ワラジを編む。春になったら、山に行って木を切る。畑に種も蒔く。それが当り前じゃろが」と。

話し終えてオモ氏は帰って行きました。ビールを飲みたいだけ飲んで、食卓にあったつまみのあらかたを食べて。

仕事って、なに？

私たちにとって、仕事ってなんでしょうね。

以前、いろんな人からよく聞いた言葉は

「自分の好きなことをやって暮していけたら、一番いい」でした。

「人々の役に立つ仕事がしたい」という意見も、時々聞きます。

でも、こういう考え方って、聞いていてどこか落着きがわるいのです。

作家になる人は、書くことが好きで、書き始めたのでしょう？　それが、いつのまにか「書けなくなるのがコワイ」になったりしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com